文化がどんなふうに変わっていったのか、どういう原因で変わっていくのかを考える時に非常に面白いケースを提供している、私はそのように思っています。

§20　今後の研究について

――最後に先生の今後のご研究の予定と、どのように発展していくのか、そのあたりをお話ししていただけますか。

そうですね、実は今、後悔がないこともないのです。というのは、あまりにも大きなテーマを抱え込んでしまって、地域も広いですし、まずそれが一番ですね。日本、韓国、中国、台湾、ハワイ、ポリネシアでは他に、タヒチ、トンガ、サモア、それからクック諸島も入ります。ミクロネシアでは、パラオとか、ヤップ、チューク、トラック、いくつかありますが、パプア＝ニューギニアだとか、その近くのメラネシア、メラネシアは比較的キリスト教の影響が遅れたか、少し薄いところなんですが、そこも見てみたいですね。それからニュージーランド、もともとマオリ族が住んでいたところですね。そういった人たちが讃美歌の影響を受けて彼らの音楽がどのようになったかなど、そういうところを見てみたいです。

こうした全体を見ることによって、讃美歌の影響によって、アジア太平洋の音楽が十八世紀後半からどのように変化してしまったのか、そしてそれが現在どのよう

な形で変化が続いているのか、そういうのを見てみたいです。

ですから、まだまだいろんな地域、太平洋の島々の現地調査も必要ですし、それに関する資料、文献、讃美歌集を集めていかなければなりません。私自身、元気に研究が出来る時間が残りどれくらいあるのかそろそろ考える年齢なのですが、その時間で果たして終わるのかどうか、実はその心配が出てきました。少なくとも私自身にはとても面白いことなので、体力が続く限りやっていきたいです。これがある程度一段落し、全体像が見えた時に、改めて日本の唱歌、あるいは唱歌をはじめとした私たち日本の歌、さらに日本の音楽が（明治以降の日本の音楽が）何であったのか、全く新しい面が見えてくるのだろうとそれを期待しているわけです。

近代の日本の歌の歴史というのは、日本人である保証を絶えず危険に曝しながら歩んできた道だと思います。それは破壊と再生の道でもあったのです。「日本を太平洋全域の諸文化の歴史の中に位置づける」という考えがあります。同じように私も日本の近代音楽を太平洋全域の音楽文化の歴史の中に位置づけたいと思っています。

新しい音楽教育史もこの中に含まれ、その歴史は近代の日本音楽教育の意味とこれからの方向を示唆してくれるだろうと思います。

――壮大な構想だと思いますけれども、是非ともそれを達成されて、私たちがその成果を見ることの出来る日が近いことを期待しています。本日はどうもありがとうございました。